

2012年マイワシ

単位：数量，1,000トン、価格，円/kg

年	数								量						
	生産地	輸 入		輸 出		東京		在 庫	加 工 品				生産	消費支出 生(2)	
		ミール	生冷	生冷	缶	生	煮干		缶	身入	塩蔵	煮干			塩干
23	175.8	131.2	234.4	8.6	12.7	8.8	4.5	2.1	15.6	5.0		1.1	21.3	19.0	761.0
24	134.2	95.7	252.9	4.4	23.1	8.2	5.1	2.2	14.0		1.2	21.4	18.2	687.0	
%	76	73	108	51	182	93	112	106	90	0	-	111	101	96	90

年	産 地	価 格						
		輸 入		輸 出		東京		消費支出
		ミール	生冷	生冷	缶	生	煮干	生(円)
23	48	116	81	57	669	360	532	545
24	56	110	97	63	713	344	567	509
%	117	95	120	111	107	96	107	93

海域	23	24	対比(%)
道東	1	6	697
三陸	4	6	170
常磐	79	55	70
九州	5	6	134
山陰	29	17	60
その他	13	9	66

MAX：S63年 4488千トン

漁獲量と資源

24年のマイワシの漁獲量は、まだ絶対量としては少なく13.4万トンで前年の17.5万トンを下回った。

道東漁場では、昨年引き続きマイワシの漁獲がみられ、前年（1,882トン）の上回る6,325トンの水揚げをみた。一方、カタクチイワシは約2,087トンで前年（3,509トン）をかなり下回った。北部太平洋海域のマイワシの漁獲は、犬吠～房総海域での漁獲が前年を下回ったことで、三陸近海で比較的好調だったものの、前年を下回った。また、山陰でも、前年をかなり下回る漁獲に終わった。

太平洋系群のマイワシの資源量は、1980年代の1000万トン以上の高い水準から、1990年代に減少し、2002年以降2007年まで10万トン台の低い水準で推移したが、2008年以降の比較的良好な加入により、2011年は63.3万トンと増加した。同様に親魚量は2002年以降ごく低い水準で推移したが、2011年は28.0万トンとBlimit以上に増加した。現状の再生産関係では将来的に資源の現状維持～増加が見込まれるが、現在の海洋環境は、環境指標の動向からみて、1980年代のような資源の増大を可能とさせるような状態にはないと判断され、近い将来に高水準期へ移行していくことはないと考えられている。

対馬暖流系群のコホート解析の結果から、資源量は1970年代から増加し、1988年には1,000万トンに達したと推定され、その後減少し、1995年に資源量は100万トンを下回り、2001年には1万トンを下回ったと推定されている。2004年以降は増加し、2005年より再び1万トンを超え、2011年の資源量は11.4万トンと推定され、資源水準は低位、動向は増加傾向と判断されている。

産地水揚量と価格

24年の水揚量は、9.6万トンで前年（13.1万トン）をかなり下回った。したがって価格は、56円で前年（48円）を上回った。

北部太平洋海域での漁は、三陸がやや好調であったが、主体の常磐・犬吠海域で低調であったことで、前年をかなり下回った。なお、本年のミール相場も、高値に張り付いており、前年来の20万円/トンが周年続いた。

三 陸

24年の三陸での漁況は、初漁期（北上期）の4、5月は前年同様漁獲皆無であったが、夏場にやや漁獲が好調に推移した。

三陸(単位:1000トン)			常磐(単位:1000トン)		山陰(単位:1000トン)		日本海北(単位:1000トン)	
月	23年	24年	23年	24年	23年	24年	23年	24年
1	0.0	1.4	0.1	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0
2	0.4	0.3	5.6	2.8	0.1	0.3	0.0	0.0
3	0.1	0.0	9.7	9.9	0.1	0.5	0.0	0.0
4	0.0	0.0	5.1	3.8	3.1	10.7	0.0	0.0
5	0.0	0.0	9.7	11.3	13.7	2.9	0.0	0.0
6	0.0	0.1	20.3	2.7	7.6	1.0	0.0	0.0
7	0.1	2.4	13.3	14.7	0.1	0.1	0.0	0.0
8	0.2	0.9	4.0	8.1	0.1	0.1	0.0	0.0
9	0.0	0.0	2.5	0.1	0.3	0.5	0.0	0.0
10	0.3	0.1	2.9	0.0	1.6	1.3	0.0	0.0
11	0.9	0.0	1.2	0.8	2.4	0.0	0.0	0.0
12	1.5	0.9	5.0	0.5	0.2	0.0	0.0	0.0
計	3.6	6.1	79.4	55.2	29.2	17.4	0.0	0.1

MAX: S61年1097千トン MAX: S58年822千トン MAX: H元年713千トン MAX: -

秋から冬場の南下期は昨年を下回る漁獲に終わった。

魚体は、周年を通じて2011年級群主体に漁獲された。

常 磐

24年の常磐での漁況は、原発による放射性物質漏れの影響もあって、操業区域の制限が本年も続いた。初漁期の越冬群の漁獲が低調、北上期においても前年を下回った。また、後半の南下期も前年をやや下回る漁獲に終わった。その結果、前年をかなり下回る結果に終わった。

魚体は、周年を通じて2011年級群主体に漁獲され、越冬、北上期は小中羽・中羽主体、南下期は中羽主体に漁獲された。

山 陰

24年の山陰での漁況は、今年は4月にまとまった漁獲があり、期待を持たせた。しかし、その後はまとまった漁獲はなく、全漁期を通じて低調であった。その結果、水揚量は昨年をかなり下回った。

また本年のカタクチイワシは、下半期9、10月に集中し、例年まとまる4、5月には低調に推移し、水揚げも前年を下回った。

在 庫 量

本年の平均在庫量は、1.4万トンとなり前年(1.6万トン)をやや下回った。これは、国内生産の減少が輸入品等の減少が輸出の若干の増加を打ち消した結果である。したがって越年在庫も1.2万トンで前年(1.4万トン)をやや下回った。

輸 出 入

本年の輸入ミールは、25.3万トンで前年（23.4万トン）をやや上回った。

輸入ミールは21世紀に入って再度増加傾向を見せてきた。2001、2002年は40万トン台に輸入量も回復しつつあり、2006年も2002年以来の40万トン突破となったが、2007年以降市況の高騰やペルー沖のアンチョビーの不振もあって30万トン台前半の水準で推移し、本年も前年をやや上回ったものの、2年続きで20万トン台の低水準となった。

また、平成7年頃から餌料不足により従来から外国（米国、メキシコ、オランダ）からの原魚輸入もみられていたが、現在では米国、メキシコの2国が主体である。本年は国内生産がやや減少したものの、輸入冷マイワシは夫々2,033トン、1,356トンと引続きやや減少している。また、その他少ないながらも中国を始めアジア諸国、EU等からも輸入されている。本年は0.4万トンで前年（0.8万トン）の半分に減少した。

輸出は缶詰と冷凍に分かれるが、缶詰輸出は、サバ缶同様減少の一途を辿っており、本年も8トンで前年（9トン）同様僅かであった。

また、冷凍輸出は引続き国内漁獲が比較的安定していることを反映し2.3万トンと前年（1.3万トン）を大幅増となった。

価格は、缶詰が713円で前年（669円）を上回り、冷凍は63円で前年（57円）をやや上回った。

消費地入荷量と価格

本年の東京の入荷量も、5.1千トンで2年ぶりに前年（4.5千トン）を上回った。

マイワシは近年の資源量の低水準の中でも最低の時期を脱しており産地水揚げの減少もあったものの、千葉等からの入荷が減少したものの日本海側（富山、石川、鳥取等）からの入荷が増加したことで入荷は増加した。

価格は、344円で引続き前年（360円）をやや下回った。しかし、家計消費でみると今年も数量、購入金額とも減少が目立ったが、消費需要は依然伸びていないことが伺える。煮干しは、2.2千トンで前年（2.1千トン）をやや上回り、減少に歯止めがかかった。